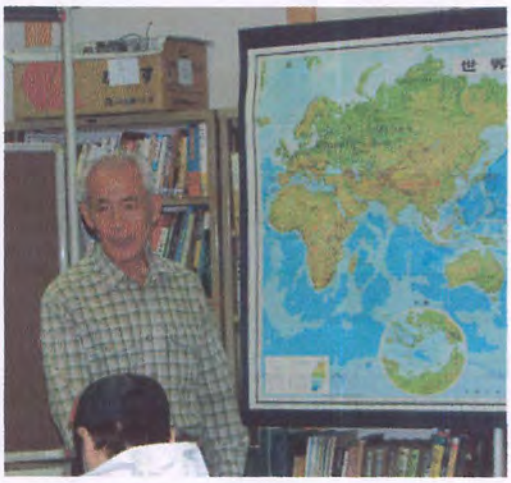
2010 年 10 月のてがたんは雨のため中止になりました。当日は案内人の木村さんに室内で渡り鳥についてお話していただきました。



●日本に飛来する渡り鳥の例

キビタキ（夏鳥）

ハチクマ（夏鳥）（撮影：久野公啓さん）

マナヅル（冬鳥）

オナガガモとオオハクチョウ（冬鳥）

ホトトギス（夏鳥）

キョウジョシギ（旅鳥）

今回のてがたんでは、木村さんが観察した宮城県の伊豆沼のマガンや長野県の白樺峠でのタカ柱の話など、実際の経験から渡り鳥について説明してもらいました。また地図を使って、渡りの経緯やその距離についても分かりやすく教えてもらいました。

餌資源や繁殖地を求めて鳥は渡りをしますが、渡りの目的地である繁殖地や越冬地が、開発や自然災害によって消失すると、渡り鳥の個体数や渡りのルートに大きな影響が出てきます。近年の環境変化によって、渡り鳥が減少したり、あるいは一つの場所にたくさんの個体数が集中する傾向にあります。

日本では九州の出水平野がナベヅルやマナヅルの越冬地として有名で、年々個体数が増加していますが、それは越冬地の減少による一カ所集中によるものと考えられます。さらに近年は渡り鳥が人間の餌付けに依存し、習性を変えてしまうことも多く、今後は越冬地の環境が、どれだけの渡り鳥を支えられるキャパシティを持っているか、考えるべき課題です。

コハクチョウの繁殖地の様子

手賀沼のコブハクチョウの巣や子育てを様子を見たことがある人もいると思います。コハクチョウやオオハクチョウは、日本に越冬のため飛来し、主にシベリアのツンドラ地帯で繁殖します。

第 56 回企画展「鳥たちの旅」より（平野信明さんのご厚意により掲載）